

平成二十四年度 入学試験問題

国 語

第二回

〔注 意〕

- 一、試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- 一、問題は一ページから六ページまでです。
- 一、解答はすべて解答用紙の解答らんに入入してください。
- 一、問いの中で、字数の指示がある場合は、句読点、記号等も字数に含みます。
- 一、解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

いよいよ日本でも★遺伝子治療が始まった。原理がわかり(科学)、その技術化に成功し(技術)、そして実地の応用(社会)、という段取りをとって進められようとしている。すべてにおいて科学の所産はこのような道を歩んで人々の生活に入り込んできた。コンピューターしかり、人工化学物質の使用しかり、遺伝子操作しかりである。

その意味では、科学と技術と社会(そして人間)がひとつつながりとなっていると言えよう。むしろ、この連関は文明が発祥した時点から(直接的には産業革命以来)続いたことだが、時代とともに、その時間スケールが短くなり、生じうる影響も大きくなってきた。もはや現代においては、科学と技術と社会が一体となっており、一つ一つを切り離して考えることが難しい状況になっている。

ところが、⁽¹⁾ 私たちはそれらのつながりを、相互の間の★フィードバックをも含めて、きちんと考えてきただろうか。それを教育の場で活かしているだろうか。実は、新しい大学へ移って「科学・技術と社会」という講義を担当することになり、その反省も込めてさまざまな角度から議論を学生たちにつづけることにしている。

日本語では「科学技術」と一言で表わす言葉が定着してしまったように、科学と技術が区別なく、同一であるかのように思われている。確かに、科学と技術は連続し重なり合った面が多くあるから、あるキョクメンを見れば科学技術という言い方は正しい。しかし、いったんは、科学と技術は別々の人間の営みであることをはっきり認識することが必要である。科学は「発見の知」であり、技術は「創造の知」であって、それぞれが異なった目的を持ち、自ずと異なった論理があることを充分把握しておかねばならないからだ。科学は普遍であるのに対し、技術は特殊である。あるいは、科学は単純系を問題とするのに対し、技術は複雑系を相手にする。⁽²⁾ これらの違いを知っておくことは、科学と技術の本質を学ぶ上で重要なのである。

例えば、科学で発見された原理は一つであっても、その技術化の方法は複数あり、実際に採用されている方式が最善であるかどうかは自明ではない。そこには、⁽³⁾ 人間の要素、つまり社会との関連が絡んでいることが多い。なぜ、その方式が選ばれたのか、他の方式も検討されたのかを再吟味

し、その「★合理性」の根拠を問うことは必要な作業だと思われるのだ。

その場合、公害は言うに及ばず、個々の技術の限界や大規模に、⁽¹⁾ テンカイされた場合の問題点を、人間と地球レベルへの効果という観点から多面的に検討しなければならない。そもそも科学は応用されることを想定しておらず、技術は技術で自前の発展論理で動いているから、そこまで発想することが少ないのである。さらに、技術が社会や人間にどのような影響を与えたかの結果はむしろ逆のこと、逆の、社会や人間から技術への、そして科学へのフィードバックをも、⁽²⁾ シヤに入れるべきであるだろう。人間の欲望や虚栄心、国家の威信やメンツが、科学や技術に及ぼした影響のことである。それらが科学や技術の内実を歪め、偏りを生じさせているかもしれない。科学や技術は社会と独立したものでないことを検証すべきなのだ。

私たちは、科学や技術の一方的な★享受者でもなく、その災厄の一方的な受難者でもない。享受者であり受難者の双方であるのだ。その根源には、科学や技術の成果を社会(人間)が選んだ(あるいは押し付けた)部分が多くあり、科学や技術のみに帰せられない要素を抜きにして語れないためである。例えば、資源が無限にあり環境容量も無限であるという成長神話はもはや崩れたはずだが、人間は相も変わらずその夢を追いかけている。それが現在の矛盾を累積させており、科学・技術の享受者であるとともに受難者であることを余儀なくさせているのだ。

全く異なった問題を考えてみよう。日本経済が「空洞化」したと言われるが、それは国際分業体制を押し進めていることを意味する。安い人件費を求めて技術移転を進めているのである。技術が社会の要請で国境を越えているのだが、それが技術の質に影響していることは否定できないだろう。ところが、社会が求め続ける成長神話依存はちっとも変わっていない、そのため技術や科学の内実を歪めている可能性があるのだ。(例えば、飛行機の整備を人件費が安いことを理由に開発途上国に任せようになっている。さて、それがどのような結果を招くのだろうか。)

現在は、グローバルに社会と科学・技術の関係を再吟味しなければならぬ状況であると言えよう。それはまた、現在の困難を技術の手直しで乗り切ろうとしても、そう簡単ではないことを意味する。そのことは、オン層破壊の元凶であるフロン問題を考えてみればわかる。先進諸国が製造や使用を禁止しても、開発途上国は⁽¹⁾ ミツユをしてでも使おうとするだろう。フロンを使って先進諸国だけがまず儲け、しかる後に開発途上国には禁止

しようとしていると受け取れるからだ。さらに、オゾンを破壊しない新素材が開発されても、値段が高く、製造工程が複雑であれば、開発途上国には手が出ない。それでは世界中に広がることにはならないだろう。フロンドで儲けた金を新素材の開発に投資して途上国に安く供給しなければ、フロンド禁止の⁽⁴⁾実は上がらないのだ。

そのような世界の合意があつてはじめて、新たな原理の追究や技術体系の全面的な再検討がようやく進むのである。科学や技術の内在的な論理だけで、それが進められるのではない。社会からのフィードバックが大事であると言いたいのだ。

もう一つ、技術が人間と等身大であるか、も問われねばならないと思う。間違いを犯すのが人間で、その人間が技術を使っているという当然の事実のことだ。ところが、技術の設計思想は、完全な人間とは言わないにしても、少なくとも誰もが合理的な使い方をするという前提に立っている。むしろ、^{*}フェイルセーフは考慮されてはいるが、それを使う人間が設計者と同じレベルであると想定されたシステムなのだ。ところが、「そんなバカな」使い方をするのが人間であり、「考えられない」行動を平気で行うのも人間なのである。そのような人間の矛盾した心理を深く把握するのが⁽⁵⁾技術思想の原点なのではないだろうか。その意味で、人間からの科学や技術へのフィードバックがもつと真剣に考えられなくてはならないのだ。

ハイテク化されたジェット機の事故は、⁽⁶⁾コンピュータと人間をつなぐシステムがいかなるものであるべきかを物語っているように思われる。人間は、間違いをしないでかすまます焦つて間違いを繰り返す。しかし、ある瞬間にハタと間違いに気づいて修正しようともする。ところが、コンピュータは、人間が間違いを犯したことしか感知しないから、その前提のまま人間の修正を拒否してしまう。こうして人間とコンピュータが格闘するうちにジェット機は墜落してしまつた、という事件が起きているのだ。

このような複雑な人間心理を完全に^{*}シミュレートすることは可能なのだろうか。私はむしろ、技術一辺倒にならず、ある一定部分は人間に任せきりにするシステムを工夫することの方が大事なのではないかと思つている。技術が人間を支配する流れに抗して、人間が技術へ課する制約を考慮すべきと言いたいのだ。所構わずケータイが横行し、クルマが手を振つて道路を占拠している事態を、「異常」だと捉える感覚のことである。

また、いくら高級な機能を持つていても、使う人間の能力以上に働くことがないのは、私のコンピュータを見ればわかる。一方的に技術が進歩しても人間が追いつかない限り、その技術は本来的に活かされたことにはならない。と言うと、常に人間は技術に追いつかねばならないような錯覚を持つてしまう。確かに、科学の世紀に生き、その技術化の成果を満喫している私たちだから、そうあるべきだと思つても無理はない。しかし、そこに落とし穴が隠れているように思えるのだ。すべての技術は「合理的」で、それを使いこなせない人間は「非合理的」なのだろうか。私には、そのような見方を疑う方がよほど「合理的」であると思えるのだ。

技術体系のことも考えねばならない。現在の大型化・集中化・一様化の技術が本当に生きているのか、それと対極の小型化・分散化・多様化の技術はどのような場合に有効か、そんな視点を持つことも重要だろう。現在の体系が唯一ではなく、全く異なった目で見ると癖も身につけねばならないからだ。それが未来を構想する力となるはずと信じている。今ある状態を批判的に捉えることができねば、現状を変える意欲が湧いてこないだろう。それを学生たちに挑発するのも私の講義の^(オ)イトでもあるのだが。

(池内了『転回期の科学を読む辞典』)

- ★遺伝子治療……遺伝子を組み込んだウイルスあるいは細菌を体内に入
れ、病気を治す方法。
- ★フィードバック……結果を原因に反映させること。
- ★合理……論理や道理になつていくこと。
- ★享受……受け取つて自分のものにする事。
- ★フェイルセーフ……装置・システムにおいて、誤操作・誤動作が発生した
場合、常に安全に制御すること。
- ★シミュレート……実際の現象をまねること。

問一

——(1)「私たちはそれらのつながりを、相互の間のフィードバックをも含めて、きちんと考えてきただろうか。」とありますが、なぜ、現在きちんと考える必要性があるのでしょうか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 原理がわかり、その技術化に成功し、そして実地の応用という段取りを踏むことが科学技術を考える上で大切であるから。

イ 新しい技術には見逃している問題点があるかもしれないが、社会的な問題になる前に慎重に事をすすめる必要があるから。

ウ 科学と技術と社会の連関は時代とともに時間スケールが短くなり、生じる影響も大きくなってきたから。

エ 科学と技術と社会は一体化しており、切り離すのが難しく、ひとつながりとなっているから。

問二

——(2)「これらの違い」とありますが、その指す内容について十九字の箇所を探し、最初と最後の五字を抜き出さない。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問三

——(3)「人間の要素、つまり社会との関連が絡んでいる」とありますが、具体的には人間の何が科学や技術に影響を及ぼしたと述べていますか。十九字の箇所を探し、最初と最後の五字を抜き出さない。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問四

——(4)「実」とありますが、これと同じ意味で使われている熟語を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 忠実 イ 実質 ウ 誠実 エ 果実

問五

——(5)「技術思想の原点」とありますが、それはどのようなものですか。本文の表現を用いて七十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問六

——(6)「コンピュータと人間をつなぐシステムがいかなるものであるべきか」とありますが、どのようなシステムにすべきと筆者は考えているのでしょうか。本文の表現を用いて四十字以内で答えなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問七

——(ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本経済の空洞化は社会の要請で技術が国境を越えていることを意味しており、新興国の驚異的な発展に我々は脅かされないためにも、常に最新の技術に追いつくように努力すべきである。

イ 社会や人間が科学や技術に及ぼした影響によって、科学や技術の内実を歪め、現在の矛盾を累積させたことを考えれば、私たちは科学技術の災厄の一方的な受難者ではないといえる。

ウ 現在の困難な問題に対しては、まず新たな原理の追求や技術体系を全面的に再検討することによって解決を試みて、それで解決できない場合は社会から科学・技術へのフィードバックを考えることが大事である。

エ ジェット機の事故は、人間の矛盾した心理を深く把握することで防ぐことができるはずであり、そのためには複雑な人間心理を完全にシミュレートするような「合理的な」技術の開発をすることが求められている。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ママとふたりの気のめいるような夕食を終えて、そそくさと部屋にひきあげた。ひとりになったとたん、

「こんな状態のままじゃ、ぜったい勝てっこないよ」

カミの悲痛なさげび声^{こゑ}が耳^{みみ}によみがえった。

(わたしにはもう、カンケーないっていったでしょっ！)

ふりはらおうとしても、

「山ちゃんのおばさんのぐあいがよくなくて……」「麻也、気づいてたかな？ 山ちゃんと深雪^{みゆき}があわないって……」「深雪、クラに一度もボールまわさなかったの」……。

いわれたことばがつきつきとうかんできて、そのひとつひとつがキリキリと胸をさした。そして、さまざまな光景が……。

「飛べ飛べ飛べ、飛べ飛べ、山ちゃん！」「ナイスシューツ！」

体育館にひびくかけ声や、山ちゃんやキーちゃん……コートを走りまわるみんなのすがたや、深雪からボールを受けとったしゅんかんの手の感触^{かんじ}までがはつきりとよみがえった。

榎^{えのき}との試合が決まったと、クマさんに聞かされた日。

「いよいよだね」「どんなことをしても、ぜったい勝とうね」

キラキラ光るけやき並木の下を、深雪とふたり、はずむような足どりで歩いた……。

あの時、榎に勝つことがなよりのゆめだった。そのゆめの実現のために、チーム全員で力をあわせてがんばることが、わたしたちのすべてだった。

もし、カミのいうように、その大切なゆめが、わたしのせいでこわれかけてるとしたら……山ちゃんや深雪やカミやキーちゃんや……今までひっしにがんばってきたチームみんなのゆめを、わたしひとりのかってな事情でうばっていいわけがない。

今さら、クラに会って、なにができるかわからないけど、このままにもしないでほっといたら、きつと一生後悔^{こうかい}する。あの時の深雪たちとの約束をはたせなかったじぶん^{じぶん}に、せめて今できることが残^{のこ}されてるなら……。

思ったしゅんかん、急いで部屋を飛び出した。

「ちょっと、出かけてくる」

キッチンで洗^{あら}い物をしてたママに声をかけて、返事を待たずにげんかんを飛び出した。ぐずぐずしてたら、⁽¹⁾すぐに決心^{けつこころ}がぐらついてしまいそう
で……。

クラの家に行くのは初めてだった。けど、住んでるマンションは知ってたから、入り口の郵便受けで、かんとんに場所はわかった。エレベーターで三階まであがって、おりたらすぐ左の「301号室」。ドアの前で深呼吸してから、チャイムを押すと、

「はい、どなた？」

すぐにおばさんの声が返ってきた。⁽²⁾BCのお当番で顔はよく知っている。

「BCでいっしょだった藤原^{ふじわら}ですけど、クラ、いますか？」

「あ……ちょっと待ってね」

今度は少し間があつてから、細めに開いたドアのすき間から、なぜかおばさん⁽²⁾がおぼろげに顔をのぞかせた。

「おそくにすみません。急用があつて、すぐ帰りますから」

「容子^{ようこ}、ぐあいが悪くて、学校帰ってきてから、ずっと部屋で寝てるの」

おばさんは家の中を気づかうような小さな声でいった。

「あ……クラの部屋、どこですか？」

「奥^{おく}の右だけ……でも、だれか来ても、会わないって……」

「どうしても直接話したいことがあつて……すみません、おじやまします」
強引^{つういん}にドアを押し広げて、おばさんを押しつけるように中に入ると、

まっすぐ奥の部屋に向かった。「YOKO」と書かれた木彫^{ぼん}りのプレートがさがつてるドアをさうと開けると、⁽³⁾大きなクマのぬいぐるみをひざに
だいて、ぼんやりかべにもたれてすわつてた。

「ごめん、かつてに入つてきちゃつた」

声をかけたとたん、ギョツとしたように顔をあげて、わたしだとわかると、あわててぬいぐるみを放り投げるようにして立ちあがった。そして、信じられない顔でじつとわたしを見つめた。

「どうして、麻也が……」

後ろ手にドアをしめて、クラの前にすわつた。

「さっき、カミがうちに来たの。⁽⁴⁾試合二日前なのに、クラが練習に来ないって。ぐあいが悪いなんて、うそでしょ？」

クラはだまつてクルツと背中を向けた。

「もし、わたしのことを気にしてるんなら、わたしがBCやめたの、クラとぜんぜんカンケーないから。今は話せないけど、あくまでわたしの個人的な理由だから」

クラはなにもいわない。それでも、一方的にしゃべり続けた。

「それから、深雪のことはゆるしてあげてね。こんな試合間近になって、急にメンバーが代わって、あせってるだけだと思いの。すぐにクラともうまくペースがつかめるようになると思うから」

背中を向けたまま、クラがぼそぼそ口を開いた。

「わたし、自信ないの……初めて、クマさんが麻也と交替こうたいしろっていった時から、ずっと……わたしには麻也の代わりなんて、むりなの」

「そんなことない」

⁽⁵⁾ 思わず強い調子でいい返した。

「だって、クラ、すごいまくなつたもん。わたしがいないからじゃなくて……わたしの代わりじゃなくて、今のチームにはぜったいクラが必要なんだよ。もしわたしが残ってたとしても、クマさんはきつとクラを選んだと思う。椋に勝つためには、クラの力が必要なんだよ」

うそじゃなかった。でも、こんなことをスラスラいえるじぶんにおどろいた。初めてクラとメンバーチェンジされた時、あんなにシヨックを受けたのに。ぜったいクラなんかには負けない、必ずポジションをとりもどすって……あの気持ちはどこに行ってしまったんだろう？

けど、今はそんなことを考えてる場合じゃない。

「今までがんばってきたみんなのために、お願いだから、試合に出て。深雪や山ちゃんを助けてあげて。お願いします」

両手について頭をさげた。クラはだまつてる。どんな顔でわたしを見おろしてるんだろう？

せめてチームのためにできることをって、むちゆうで家を飛び出してきただけ……考えてみれば、かってだよ。じぶんがはたせなかつた責任を、今さらクラに押しつけるなんて……。

そつと顔をあげると、クラはまだどべに立って、じつと外の暗やみを見つめていた。

「ごめん、今さら、よけいな口出しだったね」

あきらめて立ちあがろうとしたとたん、

「約束してくれる？」

クラがパッとこつちをふり向いた。

「約束？」

「麻也、BCやめないって。じゃなきゃ、わたし、試合に出ない」

「どういうこと？」

「BCやめた人のたのみなんて、聞けないし……それに、麻也ともう一度、真剣勝負したいから。だれにももんくをいわせない、ほんとの実力でベストを争ってみたいから」

おどろいて、すぐにはなにもいい返せなかつた。クラがこんなにはつきりじぶんの気持ちをおぶつけてくるなんて……いつも人の顔色ばかり気にしてたのに……。カミもクラも、なんだかすごく強くなった……。

負けてられない。そんな思いがひさびさにムクムクと頭をもたげた。今のクラに勝つには、そうとうの努力が必要だ。もちろん、チームにもどるためにも……。

「わかつた」

と答えた。

「でも、すぐにはむりだから、もう少し時間をくれる？ みんなにはじぶんからちゃんと話せるようになるまで、だまつてほしいの」

「わかつた。楽しみに待ってる。試合、がんばってみる」

どちらからともなく手をにぎりあつたしゅんかん、⁽⁷⁾ 長いこと、クラとの間にあつたわだかまりがスウツととけていくのを感じた。

(泉啓子『夏のとびら』)

★クマさん……コーチ

★BC……バスケットボール部のこと

問一

——(1)「すぐに決心がぐらついてしまいうで……。」とありますが、麻也の決心とはどのようなことですか。三十文字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問二

——(2)「なぜかおばさんがおぼろげな感じで顔をのぞかせた。」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 容子は仮病を装っているため、それを麻也に伝えるのにためらいがあるから。

イ 麻也の強引な態度が、具合の悪い娘に影響を及ぼすのではないかと心配だったから。

ウ 急用とはいえ、麻也がおそい時間に訪ねてきたことに少々腹を立てていたから。

エ 具合が悪い娘のことが気がかりで、その原因が麻也であることを知っていたから。

問三

——(3)「大きなクマのぬいぐるみをひざにだいて、ぼんやりかべにもたれてすわった。」とありますが、この時のクラの心情を表す一文の最初の五字を抜き出しなさい。(句読点や記号は含まない)

——(4)「試合二日前なのに、クラが練習に来ないって。」とありますが、クラが練習に行かない理由として、麻也がBCを辞めたのは、自分がポジションを奪ってしまったと考えられていることがありますが、もう一つの理由はどのようなことですか。四十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問五

——(5)「思わず強い調子でいい返した。」とありますが、その理由を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 弱気になっているクラに、とりあえず励ましの言葉をかけてあげようと思ったから。

イ 弱気のクラに強く迫ることで、気持ちを切り替えてほしいと思ったから。

ウ ライバル心でいっぱいであったが、内心クラの実力を認めていたから。

エ クラに対してはどんな時でも素直な気持ちになれず、同意することができないから。

問六

——(6)「口」とありますが、「口」を使った次の一～五の慣用語の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 口がすっぱくなる 二 口がへらない 三 口にする
四 口も八丁手も八丁 五 口をきく

「意味」

ア 間に立って世話をすること。

イ 言葉にだしていうこと。

ウ 次から次へとかつてなことを言う様子。

エ 同じことを、口がくたびれるほど何度もくりかえして言う様子。

オ しゃべることもすることも、ぬけめなくじょうずだということ。

問七

——(7)「長いこと、クラとの間にあったわだかまりがスウツとつけていくのを感じた。」とありますが、この表現から麻也の考え方が変わったことがわかります。その変化について七十文字以内で答えなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問八

本文の内容について述べたものとして最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 麻也はクラと約束をしたことで、闘争心に火がついた。はやる心をおさえきれずクラに勝つためにも努力をして、個人的な問題の解決を待たずにチーム全員で夢を追いかける日々を一刻も早く送ることにした。

イ カミの言葉が麻也の胸をキリキリとさしたのには、チームをやめた彼女の行動を非難するものだからであり、今までバスケットへの情熱を燃やし、夢を実現するために努力してきた彼女は深く傷ついた。

ウ 自分一人の勝手な事情でチームをやめ、すずしい顔をしている麻也に責任を押しつけられたクラは、腹立たしく思った。だまって麻也を見下ろしていたのはその態度と都合のよさを軽蔑していたためである。

エ カミの話を聞いた後、さまざまな光景やボールを受け取ったしゅんかんの手の感触までを思いおこした麻也は、もう自分には関係のないことだとは思いつつもバスケットへの思いを断ち切れないうる。